

日高市で一番最初にできたニュータウン「日高団地」。このまちに暮らす人々の今をお届けします。

住め

日高 4



柳川義和さん

ゲームもやるけど、宿題もやる。 夢は、そんな居場所づくり。

日高団地がどんな街かを一言でいうと、オールドニュータウンです。高度成長に沸いていた昭和40年以降にファミリーが流入し、進取の気性に富んだ人々が地域を大いに盛り上げました。

「先代が新天地を求めて来たわけですが、その頃は景気が良く、週末の売り出しになると、お祭り騒ぎのような賑やかさでした」そう懐かしがるのは、スーパーみどりやの店主、柳川義和さんです。それから半世紀以上が経過し、今や団地は高齢化の一途をたどっているのですが、創意工夫のもとスーパーを経営し続けています。



店主の柳川さん「みんな齢を取って、昔のように盛り上がることは難しいですが、何かできないかと思って…」



広々としたスーパーの通路。車いすやベビーカーを使うお客さまへの配慮

本物志向の生鮮食料品やお値打ち品が揃う

お店の特徴はおいしさにこだわっているところ。お客さまの多くを占めるお年寄りにとって、楽しみの一つに食べることがあります。「たくさんは食べられないので、おいしいものがほしい」というお客さまの意向を汲み、毎朝、東京都にある市場に出かけ、生鮮食料品を仕入れるようにしています。「高級品ということではなく、本来の味を提供したい」が、柳川さんの方針。肉や魚はもちろん、たとえば大和芋一つをとっても、そば専門店やとろろご飯屋さんが指名する千葉県多古産を選ぶそうです。

こうして長年、団地で商売をしてきた柳川さんですが、気になっているのは地域の行く末です。そこで、スーパー隣の旧店舗があった建物を自力でリノベーションし、サロンとして開放。商売でなかなか手が空かない身の上ながら、知り合いの伝手でマルシェを開いたり、ライブスペースやギャラリーとして貸し出したといった試みを展開しました。

新たに考えているのは、夏の暑さから逃れるシェルターとしての活用。電気代の負担については、古着販売を行うサロン利用者のご厚意で利益の一部を寄付いただける話があるようです。さらには、子どもや若者が集まる場所としてのサロン活用を模索。団地は比較的便利な場所にあり、新住民の流入がじわりと進行中。子どもが元気な街は、お年寄りも元気になります。子育てファミリーの受け皿になるような働きかけが欠かせないと考えています。



■フリーペーパー「住め日高」1～4号を発行。

文化新聞の連載記事「のこしたい店・たのしみな店」における「スーパーみどりや」への取材をきっかけに、元気なシニアが活躍する日高団地に可能性を感じ、フリーペーパーを発行(取材執筆:いしいデザイン グラフィックデザイン:黒田デザイン事務所 / 日高団地自治会の協力のもと、日高団地全戸配布)。



東京都の大森で先代が興した食品小売店が当地に移転



「みどりのサロン」には大型テレビのほか、将棋や麻雀を用意。古着を安価販売していますので、ご協力願います

●スーパーみどりや

日高市高萩東2-24-1 8:30~13:00 15:00~19:30 日祝休